

トルコ慰霊祭関係 ③

2

本日茲ニ日土貿易協定主権ノ下ニ、土國軍艦エルトグロール號復讐被害者弔祭ノ典ヲ舉行セラル、ニ當リ、本官亦其席ニ列スルノ光榮ヲ懷ヒ、謹而一言將士ノ英靈ニ告グ。
回顧スレバ土耳其古海軍少將「エミシオスマンパシヤ」閣下一行ガ、土耳其帝國皇帝「アブドゥルハミット」第二世陛下ノ旨ヲ奉ヒ、我日本帝國國土修好ノ誼ヲ訂スルノ使命ヲ帯ビ來朝セラレタルハ、明治二十三年六月ノ交ニアリ。巨艦エルトグロール號一度使節一行ヲ乗セテ横濱海門ニ入ルヤ、上下其ノ誠意ニ感テ、交禮甚ダ切ナルモノアリタリ。斯クテ「オスマンパシヤ」閣下一行ハ滯留三ヶ月、完全ニ其使命ノ成ルヲ告グ。九月十四日横濱ヲ解纜シ、歸國ノ途ニ就カレタリシモ、不幸暴風ノ襲來ニ會シ、強風浪ニ起リ、加フルニ天地晦暝咫尺ヲ辨ゼズ、遂ニ本縣熊野沖ニ覆没ノ厄ニ遭ヒ、使節以下多數ノ英士ヲ失フニ至リ。洵ニ驚愕ノ極ナリト云フベシ。爾來星霜茲ニ參拾九年、兩國ノ交誼一層敦厚ヲ加ヘ、交通日ニ繁カラントス。今ニシテ往時ヲ懷ヘバ轉々感慨ニ堪ヘザルモノアリ。只使節一行ノ偉勲今日ノ修睦ヲ致シタルヲ思ヘバ、英靈庶幾タハ以テ瞑スベキナリ。日土貿易協會茲ニ觀所アリ。土耳其帝國代理大使閣下ノ臨場ヲ仰ギ、茲ニ追悼ノ式ヲ舉グ。余輩又職ニ本縣ノ知事タルノ故ヲ以テ席末ニ列スルヲ得タリ。聊カ撫辭ヲ陳ベテ、以テ諸士ノ英靈ヲ祭ル。希クハ饗ケヨ。

和歌山縣知事 野手耐

②「土耳其古軍艦エルトグロール号遭難追悼記」日土貿易協会、1929年
昭和3年(1928) 遭難追悼祭 野手耐知事弔辞 (当館所蔵)

1

風伯不愜海若無戒倏忽覆艦難於不測之底終使遠人爲不歸鬼何其悲慘哉噫我 貴賓特派公使オスマンパシヤ君以下五百八十名共罹斯殃視聽之者痛悼哀傷洵不禁情也然而四海無異俗萬里有友邦我朝廷吊問禮澁存卹恩洽當時銅搜海底取得遺屍亡慮二百五十有八乃ト一區崇埃之地厚行斂葬定爲墓域此可以慰冥魂也歟已而義俠增田某大松某有田某賀川某等諸自投勞費採撈其沈沒物品於狂瀾覆沒中

者數閱月焉可謂篤志矣今也舉其間所收拾遺骸若干亦瘞於茲深土以被焉巨艦以鎮焉復修祭典表哀吊至情愴焉悽愴酌蓋合禮想精英之靈欣然其來格也余去月巡視其地到危巖亂立怒濤掀揚之際長息倍于前日矣輟將復往焉政繁途遠故躬不得列祭儀特使僚屬木村雄致辭辭於墓前且告以其所採獲之品目大自軍器戰艦細至衣被什具之類一切具錄以當轉送之於諸君本國政府某某等敬愛之意至矣然則身雖客死而猶還鄉土也尚享

明治廿四年三月七日

和歌山縣知事從四位勳三等石井忠亮

①「真川純一編『土國軍艦遭難者追弔祭典書』」赤川孫兵衛、1891年
明治24年(1891) 追悼式典 石井忠亮知事謹辭
(出典：国立国会図書館デジタルコレクション)

3



大橋正雄知事
(在職 昭和42、1967年～昭和50、1975年)

2

敬文
本日茲ニトルコ大使 御喪事なるハ、
多敷の御痛悼を蒙リ、トルコ軍
艦エルトグロール号の遭難、お前年追悼
式を訂せられたり、謹んで御痛悼を
申し上げます。
貴賓特派公使オスマンパシヤ君以下
五百八十名共罹斯殃視聽之者痛悼哀傷
洵不禁情也然而四海無異俗萬里有友邦
我朝廷吊問禮澁存卹恩洽當時銅搜海底
取得遺屍亡慮二百五十有八乃ト一區崇
埃之地厚行斂葬定爲墓域此可以慰冥魂
也歟已而義俠増田某大松某有田某賀川
某等諸自投勞費採撈其沈沒物品於狂瀾
覆沒中

4

敬文
本日茲ニトルコ大使 御喪事なるハ、
多敷の御痛悼を蒙リ、トルコ軍
艦エルトグロール号の遭難、お前年追悼
式を訂せられたり、謹んで御痛悼を
申し上げます。
貴賓特派公使オスマンパシヤ君以下
五百八十名共罹斯殃視聽之者痛悼哀傷
洵不禁情也然而四海無異俗萬里有友邦
我朝廷吊問禮澁存卹恩洽當時銅搜海底
取得遺屍亡慮二百五十有八乃ト一區崇
埃之地厚行斂葬定爲墓域此可以慰冥魂
也歟已而義俠増田某大松某有田某賀川
某等諸自投勞費採撈其沈沒物品於狂瀾
覆沒中

③「トルコ慰霊祭関係」(D-2023-0005-1263)
85周年追悼式 大橋正雄知事祭辞

悲劇の記憶から友好の象徴へ

上の資料は、追悼式で歴代の和歌山県知事から発表された言葉です。ここから、時代による遭難に対する認識の変化が読み取れます。

①は明治24年(1891)の石井忠亮による弔辞です。遭難から約6カ月しか経過していないこともあり、亡くなった方への慰霊やその後の救助等の活動に関することが中心で、遭難を悲劇として記しています。

②は昭和3年(1928)の野手耐による弔辞です。大正13年(1924)に日本とトルコ共和国の国交が樹立されたことをきっかけに、昭和3年(1928)の追悼式は経済活動を拡大することを目指した日土貿易協会が主催しました。「交通日ニ繁カラントス」、「只使節一行ノ偉勲今日ノ修睦ヲ致シタル」と記され、エルトグロール号の友好を目指した日本への渡航が、両国の往来の増加や友好に繋がっているとされています。

③は昭和49年(1974)の大橋正雄による祭文です。第二次世界大戦後、追悼式は串本町が主催となり、遭難は両国の友好の象徴として、より大規模に語られるようになりました。「あなた方の尊い犠牲は日土親善の礎石となり、悲しくも忘れがたいふれあいが両国民の心の中に強く生き続けているのでございます。」と記され、遭難が日本国民とトルコ国民の友好の礎になるとされています。

今年は135周年！
歴史資料となった公文書から、
式典や祭文の変遷を知ることが
できたね。

